

# 戦前日本の中国語学習誌の資料的復元：

語学教育と中国研究の關係の史的再考のために

## 温 秋 穎

はじめに	181
I 中国語学習誌という体裁の誕生	184
II 中国語学習誌を史資料として取り扱う際に注目すべき点	192
III 学習誌と学術誌の狭間に生まれた〈声〉の教育法： 『支那及支那語』を中心に	199
おわりに	207

### はじめに

---

1931年の満洲事変以降、日本の大陸侵略が拡大していくなかで、日本国内では敵性語となったはずの中国語の学習ブームが起きた。一般民衆レベルでの中国語学習の拡張と深く関係する大衆メディアとして重要であったのは、1931年から日本放送協会の第二放送で放送され続けたラジオ番組の「支那語講座」、そして1930年代から学校外で出版された多種多様な教本類や学習誌である。東京放送局による初期の「支那語講座」は、英独仏語と並んで都市部の中間層向けの「教養番組」として放送され続けたが、電波の届く範囲には制約があり、地方と農村における聴取は限定的であった<sup>(1)</sup>。これに対して、紙媒体は、電波を受信できるかどうかという物理的な制限を受けることなく、農村や外地の遠隔地まで広く流通していた。これらの安価なテキストや辞書類の出版物を通して、一般大衆のレベルで中国語に触れて学ぶ機会が大いに増加した<sup>(2)</sup>。1930年代から1940年代初頭までの時期が、明治以降の民間での中国語教本類の出版の最盛期であったことは、六角恒広が『中国語関係書書目』で行った統計からもわかる<sup>(3)</sup>。このなかで、ポケット本の軍事情用会話書のほか、音声による教育法を重視してレコードを添付した紙の教材や、娯楽的な性質をもつ

学習カードといった体裁も続々考案された<sup>(4)</sup>。1930年代初頭から1940年代まで日本国内で発行され続けた一連の定期刊行物である中国語学習誌も、以上の中国語教本類の出版ブームのなかで捉えることができる。

それでは、これらの学習誌の活発な刊行を含め、そもそもなぜ敵性語であるはずの中国語が、戦時中の日本国内で英語学習と肩を並べるほど大いに勉強されていた背景には何があったのだろうか<sup>(5)</sup>。この問題は、いままでの中国語教育史で深く考察されることは少なかった。明治から敗戦までの日本国内で行われた中国語教育を対象とする史的研究は1980年代後半から始まり、中国語教育の教師と教材の史的考証に重きを置く六角恒広と安藤彦太郎による一連の研究が代表的である。六角は、明治から民間で発行された中国語教本類を網羅的に収集して整理しており、中国語教育史研究の基礎的且つ貴重な資料集である『中国語教本類集成』(全10集、補集全5巻)や『中国語関係書書目(1867-2000)』として結実させた。安藤彦太郎(1988)『中国語と近代日本』では、戦争のなかの中国語、中国語教育の流派、明治以来の「支那語」と漢文からみる中国認識の二重構造といった近代日本社会の中国語教育と学習に関わる基礎的な問題点を提示した<sup>(6)</sup>。

ただし、六角と安藤らの研究は、戦前の「支那語教育」の実用性と非科学性を批判する反省的な姿勢を保っていた一方、教師と学習者の主体性や、中国語教育の改革者に対する注目は不足していた。例えば、桜井隆は、「ピジン中国語」が外地から内地の川柳や歌謡曲、漫才、落語の大衆芸能に持ち込まれたことから、日本国内の中国語文化に大衆性と娯楽性があったことを指摘した<sup>(7)</sup>。このように、日本国内の各場所で教え、学ばれた中国語が、いかに侵略戦争と関係していたのかということについては、慎重に検討しなければならない。さらにいえば、戦時中の日本国内における中国語学習熱の歴史的、文化的文脈を検討し、その教育と学習の動機を考察することは、近代日本の中国語文化の受容、近代日本の中国認識の複雑性の理解のための、さらに中国語教育と中国研究の関係を史的再考するための一助にもなると考えられる。

以上のように、本稿は、敵性語であるはずの中国語が戦時中の日本国内で盛んに教えられ勉強された背景は何であったのかという問題意識のもとで、これまで体系的に検討されることが少なかった中国語学習誌について、各地の図書館や古書店などに散逸する資料を可能な限り網羅的に収集・整理したうえで、その全体像と歴史的な文脈を提示し、資料的価値を検討する。具体的には、1930年代の日本国内において代表性があり且つ一次資料もより揃っている支那語学会『華語新声』(華語新声社)、宮越健太郎主幹『支那語』(外語学院出版)、奥平定世主幹『支那語と時文』(開隆堂)、大阪外国語学校支那研究会『支那及支那語』(宝文館)、宮原民平主幹『支那語雑誌』(蛭雪書院)の5誌を中心に、特徴と創刊され

た経緯、史資料として取り扱う際の注意点を考察し、その上でこれらの学習誌と中国語の教育と研究の改革、ないし中国研究の改革との関係を提示したい。

これまでの中国語学習雑誌に注目した研究は、安藤や六角と同じく「支那語教育」を反省する立場に立っており、学習誌の編集あるいは雑誌の内容と戦争の関係に重きを置いていた。また、誌面に表れたいわゆる文化的な性格と、侵略戦争に加担する要素を対立的に捉える傾向が見られる。例えば、藤井省三（1992）『東京外語支那語部—交流と侵略のはざままで』では、1920年代までに東京外語支那語部で行われた白話文学を教材としたという革新的な動きを認めつつ、1930年代に発行された『支那語』が、東京外語支那語部の侵略戦争を肯定しその一翼に加担したものだたと理解されている<sup>(8)</sup>。このように、中国語文化との交流が侵略の対立面に置かれる場合、「交流」が「侵略」に豹変していき、その間に学習誌のつくり手の行動様式に大きな断裂があったかのような叙述になりがちだが、その転換の理由は十分に説明されていない。

また、鳥井克之（1972）「戦前の所謂『支那語』雑誌について」は、『華語新声』に関して、中国侵略に加担する意図が「露骨には現れていないし、当時としては良心的な編集方針をとっていたといえる」<sup>(9)</sup>と判断し、『新興支那語』には「特に戦争語学としての中国語らしき色彩は余りみられ」<sup>(10)</sup>ず、その「文化主義的」な編集方針は「当時としてはそれが最低限度の抵抗の姿勢として認められる」<sup>(11)</sup>というように、これらが侵略戦争への抵抗であったという叙述をとったが、はたして抵抗と一面的に解釈するだけで十分なのだろうかという疑問も生じる。

以上のような、文化交流と侵略の関係を対立的に捉えることによって生じる議論の隘路を避けるために、以下の2つの論点に注目すべきだと考えられる。まず、1930年代後半以降に出版された一部の中国語教本は、内容面における粗製乱造の傾向は確かにあったが、これらの教本に対して「支那語の書物を書いたり、支那語を教授したりする仁は、考へてみるとまことに心臓人である。心臓人と云へば又笑つてすませるが相当功利的な、打算的な人間が多い」<sup>(12)</sup>といった同時代の中国語教師による酷評も存在しており、中国語界の内部における中国語教育を進める方法、ないし時局に対する見方、政治的主張は一様ではなかった。このなかで、さらに看過されやすいのは、当時の中国語教育の有識者の多くが、中国語教育を改革する意志をもっていたということであり、実際のところ彼らは、中国語の音読法をほとんど採用していなかった支那学や漢学という同時代の中国研究のやり方に反発し、当時からすでに「戦争語学」と呼ばれていた中国語の社会的地位にも不満をもっていた<sup>(13)</sup>。

2つ目は、上記のような教育者による改革の意志と、学習者による中国語学習熱の関係

である。1930年代以降、民間において数多くの教本類が刊行され販売されていたこと自体、中国語を学習する意欲、ニーズが少なからず存在していたことを説明するものである。後に明らかにするように、1930年代に学習誌を編集し出版した中国語の教師たちの大部分は、中国語の普及や中国語学の再編を目指すという理想を抱いた人たちであった。このため彼らによって編纂された中国語学習誌も、文化誌・翻訳誌・研究誌という多重的な性格をもっており、それらの理想が時局下の出版ブーム、読者のニーズとの間にいかなる齟齬を生みだし、それをいかに調整していったのかという過程は注目に値する。

以上のように、戦前・戦時下の日本国内の中国語教育、及び中国語教育改革を読み解く基礎資料としての中国語学習誌の資料的復元は、中国語を教え学んだ行為の動機と意味合いを、侵略戦争との関係のなかで再考しながら、当時の歴史的、文化的文脈のなかで行うことが重要だと考えられる。具体的には、例えば、学習誌の誕生した経緯と、時局や読者との関係、誌面の内容及びその変遷といった角度から精査することが可能であろう。本稿の第1章では、中国語学習誌という体裁の誕生を中国語の講義録の存在まで遡り、創刊ラッシュの時期として満洲事変前後、日中全面戦争の勃発、太平洋戦争の開始という三つがあったことを提示する。また、学習誌の創刊の契機の一つとして、文部省と出版社、中国語教育者の三者の合意が存在していたことを、『支那語と時文』の例から説明する。第2章では、中国語学習雑誌を戦前の中国語教育、中国語界を把握する基礎的な史資料として取り扱う際に注目すべき点として、「商業語学学習誌の編纂者と読者の関係—『支那語』の事例」、「何のための中国語か—中国語教育・学習と中国研究の関係」から説明する。これを通して、中国語学習誌の文化誌・翻訳誌・研究誌という多重的な自己規定を確認した上で、中国文化界の状況を日本に伝達する初歩的な「翻訳」の媒体としての機能を明らかにする。第3章では、執筆側の理想と読者側の需要との間のギャップが拡大し、研究志向が難航するなかで、〈声〉の中国語教育法のために行われた理論的な探究を、大阪外国語学校（以下、大阪外語）支那語部の学習誌『支那及支那語』を中心として論じる。

## I 中国語学習誌という体裁の誕生

### 1 講義録から学習誌へ

戦前の中国語教育は、制度的には、日清戦争後の1900年頃、外国語学校と商業学校を中心として形が整えられていった。1920年代以降、明治時期から続く外交、軍事、商業場面での実用性への関心を保ちつつも、同時代の中国の白話文学・文学革命を注目する動きが現れる。1931年、普通教育の中学校における外国語の選択肢として中国語が導入された。

満洲事変と日中戦争の勃発という時局の刺激のもとで、1930年代は中国語教育のさらなる普及の時期となり、一連の学習雑誌はこの時期に創刊され民間で発売された。

そもそも、中国語の学習内容を雑誌として活字化し、一般人に発売して学ばせるようになったのはいつ頃なのか。明治以降、専門的な語学雑誌の体裁は中国語に限られたものではなく、英語とフランス語の学習誌も刊行された。鈴木保昭の考察によれば、明治時代にあらわれた「英学雑誌」の数は20種類にも及ぶ<sup>(14)</sup>。斎藤兆史は、明治初期にエリートが英語を熱心に学んで西洋の文物を取り入れたのに対して、明治40年前後に「英語雑誌」が相次いで創刊されたことについては、英語が研究・学習の対象として客体化され、また政府の手から離れて産業として自立した意義があると論じた<sup>(15)</sup>。そのなかには、ナショナリズムの色彩が強く日本文化発信型の『英語之日本』もあれば、英文学作品の紹介を重点にして対訳の練習を設けた『英語青年』もある。斎藤は、この時期の「英語雑誌」の創刊ラッシュの背景に、新しい国際意識とナショナリズムに影響された一面や、英語が学力選抜の基準となり、大衆が受験に対応する必要性が生じたという「英語教育の大衆化」の状況が存在したと指摘している<sup>(16)</sup>。

中国語学習誌についていえば、1930年代の中国語教師・渡會貞輔の論考によれば、学習誌に先立って、連続的に発行された中国語の講義録がまず存在した。1901年5月に、善隣書院付属支那語学校から第1号の支那語講義録が発行されたという。「問答、文献、翻訳、音声、音読及小説等の諸項に分け」ているという点からは後の学習誌という体裁の前身といえるが、毎月1回発行で第7号をもって停刊となった<sup>(17)</sup>。1904年には、前衆議院議員・京都鉄道取締役兼支配人という肩書の伴直之助が編集した『清語ト清文：Far East』が、東枝律書房（京都）から毎月1回の頻度で20号まで発行された（価格は金10銭）。現存する資料から判断する限り、『清語ト清文：Far East』が、日本語母語話者に向けて発行された近代の専門的な中国語学習誌の嚆矢であると考えられる<sup>(18)</sup>。誌面から見れば、ウェード式ローマ字とカタカナを併用した「発音譜表」や発音の解説、文法の解説、「時文」の訓読、「時文」の日本語訳といった内容が確認でき、中国語を学びたい人を読者のターゲットとしていたことは間違いないだろう。日露戦争の直後に「満韓経営」<sup>(19)</sup>を大々的に掲げていた『清語ト清文：Far East』だけでなく、大正期に流行っていた中国語の講義録にも「支那商業尺牘講習録」や「支那語速成講座」、また旅順や満洲の中国語教師が参与するものがあったことからわかるように<sup>(20)</sup>、その学習の行為は日本の満洲経営ないし大陸経営の実利に大いに左右されるものであった。

1920年代には、中国語学習誌の新しい動向が、それぞれ北京と上海で現れた。まず1922年に、北京西城宝禅寺街31号において、黄子明という編集者が自力で白話研究社を立ち上

げ、『支那語雑誌：白話』を刊行しはじめた。中国語教授法の不完全さを感じた彼は、「学  
ぶ人にとって興味的に其語学の力を促進させる」雑誌を目指して<sup>(21)</sup>、当時の中国語の新しい  
文体である白話文で書かれた「評論」「時事」「社会」「風刺」「怪現象」「故事」「劇」「詩」  
「伝説」「奇談」といったジャンルの文章を掲載した。変化しつつある中国語の文体を現地  
で体感したことからこの雑誌は生まれたが、経営難により翌年には休刊に追い込まれた。

また、1928年には上海の東亜同文書院の中国語教員からなる東亜同文書院華語研究会に  
よって、中国語研究・学習のための雑誌『華語月刊』が上海で創刊された。『華語月刊』と  
旧来の講義録や『清語ト清文：Far East』、『支那語雑誌：白話』との大きな違いは、教材的  
な内容だけではなく、中国語に関する論考も掲載する研究誌としての性格があるという点  
である。松田かの子は『華語月刊』の掲載記事を検証し、「華語研究会は、『華語月刊』上  
で自身の研究成果を発表し、また学習者に教材を提供しようと考えていた。よって『華語  
月刊』は学習誌と研究誌の両性質を併せ持つて」いたことを論じ、中国の国語統一や文字  
改革に關す動きも精力的に取り上げていたと指摘した<sup>(22)</sup>。『華語月刊』が有する性格を考  
える際には、やはり東亜同文書院の中国語教育への評価は避けることができないが、それ  
を主題として教材や教育法から検証した研究の蓄積はすでに多くある<sup>(23)</sup>。この時期に東亜  
同文書院と日本国内の中国語界とは直接的な繋がりも少なく、両者の間に教育面でのコ  
ミュニケーションもほとんど見られないため、日本国内の状況を主として取り扱う本研究  
では東亜同文書院の中国語教育には深く立ち入らない。

1920年代に、中国語の会話や「時文」という旧来の範囲から踏み出し、同時代の中国語  
のより豊かな表現に目を向け、また中国の国語統一を視野に入れた学習誌が、まずは中国  
大陸で創刊されたことは興味深い。その言語が使用されている土地において、言語の変化  
により接触しやすかったために、敏感に反応することができたと考えられる。日本国内の  
中国語教育と学習は、中国大陸の状況からある程度隔てられていたものの、海外の中国語  
学習誌の存在は把握されていたはずである。その証拠として、1922年頃、『支那語雑誌：白  
話』の発行をめぐる、編集者の黄子明は東京外語支那語部の教員らから助言を受けてい  
た<sup>(24)</sup>。東京外語支那語部の教員たちが国内で中国語学習誌に本格的に取り組んだのは、  
1932年に発行された『支那語雑誌』（1933年に『支那語』に改題）が嚆矢であったが、そ  
の10年前にはすでに学習誌という体裁に関心を寄せて、学習雑誌の経営と販売について市  
場を観察していた可能性がここからわかる。しかし、東京外語の宮越健太郎<sup>(25)</sup>らは1920  
年代初頭から長い間、日本国内での学習雑誌の創刊を実行しなかった。戦前期のもっとも  
長く続いた中国語学習誌である『支那語雑誌』（以下『支那語』）が外語出版院（東京）か  
らようやく世に出たのは、春陽堂（東京）の『支那語雑誌』の創刊とほぼ同時期、日本放

送協会 JOAK の「支那語講座」が放送されてから一年後のことである<sup>(26)</sup>。

1920年代後半以降、中国語教育法の改善にともない、「講座」を題とする一連の教本が出版されたことは、1930年代の学習誌の流行の前奏であったと考えられる。渡會貞輔の記述によれば、「昭和に入つてから講座物が流行し宮越先生、清水、杉両氏の短期支那語講座（三冊）、宮島吉敏氏の支那語講座（二冊）、加藤龍雄氏の現代支那語講座（八冊）、杉氏の最新支那語講座（六冊）、宮越、神谷両先生外数氏の現代支那語講座といつたやうに全く講座万能時代を出現し全く応接に違なき有様であつた」という<sup>(27)</sup>。このなかで言及された、宮越健太郎、清水元助、杉武夫共編の『短期支那語講座』の内容をみると、「発音篇」「読本篇」「会話篇」という大きな分類の下、講座を分けて語彙と文章の傍で解釈を記している点が大きな特徴として見て取れる。それまでの中国語教本では文法や解説がほとんど施されることがなく、教育現場においてさえ中国語には文法がないとされたこともあった<sup>(28)</sup>。1930年前後になってからようやく、一般人に向けた体系化した中国語の教育法が開発され、学習の内容が活字化し出版されるようになったのである。さらには、「講座」という名前が暗示するように、学校の講義や講習会で直接に学ぶかのように、教師から直接に教わることが可能であると読者に訴えたかったのかもしれない。このように、「講座物」は講習会で用いられた講義録から大衆レベルでさらに発展したものであり、連続的に発行された学習誌の前奏とその補完だともいえよう。

## 2 学習誌の体裁と流通範囲

表1に示したように、支那語学会から『華語新声』が発刊された1931年から、『支那語』（外語学院出版部）、『支那語と時文』（開隆堂）、『支那語雑誌』（蛭雪書院）の3誌が『支那語月刊』に統合された1944年まで、日本国内では9種の中国語学習誌が発行されていたことが確認できる。なお、天理外国語学校崑崙会から発行された『支那語研究』については、中国語研究の専門誌であると判断できるので、ここでは中国語学習誌と区別して取り扱い、表1の一覧には入れていない。また、1930年に大連で発行された『善隣』<sup>(29)</sup>と、那須清(1992)『旧外地における中国語教育』で言及された満洲国語研究会『満洲国語』、六角恒広(2002)『中国語教育史拾遺』で紹介された南満洲鉄道株式会社社員会『協和』も含めれば、1930年代以降、外地と内地で発行された中国語学習誌は少なくとも11種類が存在した。

日本国内で発行された9種の学習誌は、存続した期間には長短の差があるが、発行の間隔としては全て月刊で、誌面の大きさが縦22 cm × 横15 cm ほどのサイズ、ページ数が30ページから50ページほどであるということから考えれば、体裁において非常に似通ったものであるといえる。

表1 戦前に発行された日本人向けの主な中国語学習誌の一覧

中国語学習誌	創刊 - 停刊	出版元	編集者、主要執筆者
『清語ト清文： Far East』	1904-1905	東枝律書房（京都）	伴直之助（前衆議院議員、京都鉄道取締役兼支配人）。
『白話：支那語雑誌』	1922-1923	白話研究社（北京）	黄子明。
『華語月刊』	1928-1943	東亜同文書院支那研究部 （上海）	東亜同文書院華語研究会。
『善隣』	1930-1945	善隣社（大連）	中谷鹿二（善隣書院出身、元陸軍通訳・満洲日日新聞記者）等。
『華語新声』	1931.6-1932.11	華語新声社（東京）	上野豪彦（発行兼編集人）。岩村成允、宮越健太郎、神谷衡平、田中慶太郎（文求堂書店）、奥平定世等。
『支那語雑誌』	1932-1933	春陽堂（東京）	小田嶽夫（東京外語卒、外務省中国領事の経歴あり）。
『初級支那語』	1932.9-1932.12	外語学院出版部（東京）	宮越健太郎（東京外語教授）、神谷衡平（東京外語教授）、杉武夫（大阪商科大学教授）等。
『支那語』	1933.1-1944	外語学院出版部（東京）	東京外語の講師のほか、高等商業学校、陸大陸士、満州の中学校、政府機関等の中国語講師。
『新興支那語』	1936.11-1938	尚文堂（東京）	奥平定世、有馬健之助、田中清一郎等。
『支那語と時文』	1939.7-1944	開隆堂（東京）	奥平定世、塩谷温、平岩房次郎、有馬健之助等。
『支那及支那語』	1939.2-1943.10	宝文館（大阪）	大阪外国語学校支那研究会（吉野美弥雄、金子二郎、伊地智善継、小田信秀、高田久彦等）、商業学校の中国語教師。
『支那語雑誌』	1941.1-1944	蛭雪書院（東京）	宮原民平、魚返善雄、實藤恵秀等。
『支那語月刊』	1944- ?	帝国書院（東京）	神谷衡平、竹田復、宮越健太郎、實藤恵秀等。

中国語の講義録と「講座物」の延長線上に、情報の流通を加速化する雑誌というメディアによる中国語学習誌が現れたことは、以下の2つの側面から理解できる。第一に発行の頻度から見れば、発行が一回で終わる一般的な中国語教本と比べて、雑誌という体裁の発行は連続的であり、コラムの連載や最新の受験参考といった内容により、絶えず読者の学習意欲を刺激する機能を持っている。第二に、一般の図書よりも、多量かつ散漫な情報が載せられていることが特徴である。一人の講師ではなく、複数の執筆者から学ぶことが可能である。

それでは、学習誌によって加速された中国語学習の情報の流通は、どれほどの範囲に及んでいたのだろうか。学習誌の発行部数を記録する資料は極めて少ないが、小林昌樹編『雑誌新聞発行部数事典—昭和戦前期 附． 発禁本部数総覧』によれば、宮越健太郎主幹『支那語』（外語学院出版部）第10巻第10号（1941年）は、国家総動員法違反を理由に発禁処分を受けており、その号の発行部数は5200部だったという記録が残されている<sup>(30)</sup>。同じ時期の論壇雑誌『改造』の発行部数は1号で6万、7万部もあり、英語専門誌の月刊誌『英語研究』は月1万部ほどで、『支那語』の2倍である<sup>(31)</sup>。『支那語』と同じく5000部台だった雑誌として、外交時報社が発行した論壇雑誌の『外交時報』が挙げられる。地方における規模のより小さい雑誌や会報の類は、月の発行部数は数百部しかなかった。これらの雑誌と比べれば、『支那語』は語学の専門誌としては、その発行部数が決して少なかったとは言えない。同時期に発行された日本放送協会「支那語講座」のラジオテキストと比較する場合、1940年度に発行された「支那語講座」テキスト4冊の発行総数は4万部弱で<sup>(32)</sup>、1冊の平均的な発行部数は1万部前後であったと推定される。『支那語』のほかに『支那語雑誌』（蛭雪書院）といった他の学習誌の市場の存在を考えると、中国語を学ぶために学習誌を利用する人は、ラジオ放送を利用する人より多かったという可能性がある。とくに電波を受信できるかどうかという物理的な制限を受けていないため、ラジオ番組の「支那語講座」よりも広く農村、外地の遠隔地まで流通していたことはたしかである。学習誌の編集後記と模擬試験の受賞者名簿からみれば、朝鮮、ハルビン、天津、上海、大連、台湾といった外地、海外にいた読者が少なからず存在していたことがわかる。このような外地での販売は売捌に頼って実現された。例えば、『支那語』の「大売捌」として、東京堂、北隆館、東海堂、大東館が挙げられる。なかでも東京堂は、当時の朝鮮・満洲における雑誌取引の最大手であった。

### 3 時局の追認のもとでの創刊ラッシュ

1930年代に多くの学習誌が創刊された当時、中国語研究と中国語学習の意義は日中関係や中国関係の時局と結びつけられていた。例えば、1932年に創刊された中国語学習誌『支那語雑誌』（春陽堂）の「発刊之辞」には、以下のように記されている。

近時日本の対支対満関係の逼迫、発展は一般世人をして頓に支那語の重要性を認識せしむるに至つた。而かも実は支那語の重要性は今日に初まつたことではなく、夙に一部欧米人士間に於てさへ之が研究の完成は遙かに日本を凌駕するものある程であつた。現時の日本に於てさへ之が十全なる専門的研鑽の必要は勿論のこと乍ら、今日の

日本に最も緊急に要望せられてゐるのは、軍人、官吏、実業家、学生のあらゆる層を問はず一人でも之が初等知識獲得者の多からんことである。

抑も一国の国情を理解するためにはその国の人間を知ることが必要であり、人間を知るためにはその人の語る言葉を知ることが必要である。この意味に於ても支那語は、単なる実際上の事務遂行の上の便益以外に支那及満洲を知る一つの重要な鍵でもある。

本誌はこの時代の必要に鑑み、万人が僅かの余暇を利用して楽しく、気軽に支那語の初等知識を獲得すると同時に支那の事情の一端を理解するに便ならしめんと意図の下に刊行された。<sup>(33)</sup>

ここでは、中国大陸と満洲を知る鍵として、また、階級を超えて「万人が僅かの余暇を利用して楽しく」得られる知識として、中国語の教養が位置づけられている。

また、1932年に創刊された宮越健太郎主幹『初級支那語』（外語学院出版）では、「満洲国独立と共に日満の政治的、経済的、文化的関係は益々密接となつて来ました。支那語の必要もいよ／＼直接的となり、支那語研究者は勿論、実地に彼地にあつて大々に活躍されむとする諸氏にとつて誠に本誌は無二の伴侶となることを契います」<sup>(34)</sup> というように、満洲国の建国を意識して満洲に渡る日本人を読者のターゲットとしていた。

1941年に創刊された宮原民平<sup>(35)</sup> 主幹『支那語雑誌』（蜚雪書院）の「創刊の言葉」では、日本の当面の問題を「支那事変の処理問題」と「日本を盟主とせる大東亜共栄圏なるもの建設」の二つに帰して、「此等の諸案件の遂行途上、政治・経済・文化の各層に於て共栄圏内相互の交渉が繁くなつて来るにつれて、最初に取上げられるのは何と云つても言葉の問題であります」、「百年二百年の後ならいざ知らず、大和民族現前の使命達成には支那語の活用は不可欠だつたのであります」<sup>(36)</sup> として、「共栄圏内相互の交渉」と「大和民族現前の使命達成」のための中国語学習の意義を説いた。

もちろん、時局から距離を置いた学習誌もあった。奥平定世<sup>(37)</sup> は、JOBK「満洲語講座」から降板した3年後の1936年に、『新興支那語』（尚文堂）の編集作業に着手し、1937年の停刊まで政治を敬遠する態度を保ち続けたが<sup>(38)</sup>、同誌はわずか2年で停刊となった。その理由は特に記されていないが、雑誌の編集方針が読者の要求とは一致しておらず、販売が振るわなかったと推測できる。

#### 4 文部省・出版界・教育者の合意—『支那語と時文』の事例

学習誌が時局、文部省と連動し、学習熱を創出するにいたった過程を最も明確に裏付けられるのは、1939年に創刊された『支那語と時文』の事例である。結論から言えば、『支

『支那語と時文』は、「支那語の修得と共に、文部省も既に命令せる如く、「時文の修得」とを眼目として、修学者のよき友として進む可く生れたのである」<sup>(39)</sup>とあるように、中国語学習を奨励する文部省の提唱に応じて創刊された雑誌であった。

『支那語と時文』の執筆者であった辛島驍<sup>(40)</sup>の回想によれば、「開隆堂主人が、此の雑誌の発行に奮起された」<sup>(41)</sup>という。また、東京外語卒の北浦藤郎によれば、「日支事変が始まるころ開隆堂という本屋があった。あそこで先生（引用者注：塩谷温）に呼ばれまして、私と奥平、それから坂井喚三さんが来まして、たぶん坂井さんの発案だろうと思うんだけど、支那時文の雑誌をやらないかというお話があった」<sup>(42)</sup>。開隆堂書店は1927年に東京神田で発足された出版社で、戦前の旧制中学や高等学校、専門学校、大学予科に向けて、英語や漢文などの参考書、教材を多数刊行しており、文部省編纂の「支那文講習教材」を出版したこともある<sup>(43)</sup>。坂井喚三に関する資料は多くないが、この頃に文部省督学官を務めていた人物だと考えられる<sup>(44)</sup>。同誌創刊号の編集後記では、塩谷温の門下生である奥平定世が、「編輯に當りて、坂井督学官の心からなる御注意と御激励に感謝の意を表すと共に、開隆堂主中村寿之助の切実なる援助に感謝するものである」<sup>(45)</sup>と書いており、誌面の内容や構成にいたるまで、文部省関係者や開隆堂からの助言や注文があった。

上記の回想だけから雑誌の具体的な発案者を確定することは難しいが、注目すべきことは、「時文」の教育をめぐる、開隆堂と文部省、塩谷温の三者が、すでに協力関係をもっていたことである。文部省は、時局の把握に役に立つ同時代の中国の新聞・雑誌の記事、公文書、書簡、白話文などを指す「時文」の学習が必要であるとして、1939年2月9日の文部省訓令で、中国語時文を正式に師範学校・中学校・実業学校の必修科目として国語漢文科に導入しようとした。訓令を公布する前に、文部省は日本各地で中学校の国語科目の教師に向けて「時文」の講習会を開いている<sup>(46)</sup>。講習会の教壇に立つ教師のなかには、後に『支那語と時文』の創刊の発起人になった塩谷温と坂井喚三がいた。塩谷温は、1938年2月に文部省が各地で主催した「時文」の講習会で講演をし、東京の「時文」の講習会で教えた。開隆堂とは親しい付き合いがあり、開隆堂の看板の題字も彼の筆によるものである<sup>(47)</sup>。1939年に塩谷は漢和辞典の『新字鑑』と教科書である『中等学校時文読本』を開隆堂から出版しており、それらは朝鮮総督府が開いた「時文」の講習会でも用いられるなど、中国語「時文」教育の大御所と呼べる存在であった<sup>(48)</sup>。坂井喚三は1938年2月に広島と鹿児島島の「時文」の講習会で教えており、塩谷温と1927年に『漢文課題新選』（弘道館）を共編した。

以上のように、文部省が主催した「時文」の講習会や、「時文」が中学校の漢文科に導入されたことから刺激を受け、関係者が奮起して「時文」学習の補習教材を作ったという『支

『支那語と時文』の創刊の経緯が読み取れる。この創刊の経緯は、編集者としての中国語教師が世の中の風潮や読者の学習意欲に直接に応えたものであるというより、むしろ文部省を頂点とした中国語の公教育の制度の中で、出版界、中国語関係者、中国語教育者の三者の合意によるものであった。

## Ⅱ 中国語学習誌を史資料として取り扱う際に注目すべき点 ——

### 1 商業語学学習誌の編纂者と読者の関係—『支那語』の事例

前章で示したような経緯で生まれた中国語学習誌には、当時の教師や学習者らの多様な観点が反映されており、様々な角度から分析する価値がある。本章では、中国語学習誌を史資料として取り扱う際に注目すべき点として、特に二点をあげたい。その一つ目は、学習誌が商業雑誌であるため、雑誌の編纂者と読者の緊密な関係を考慮すべきことである。

「はじめに」で論じたように、日本国内の各地で教え、学ばれた中国語が、いかに侵略戦争と関係していたのかということについては、慎重に検討しなければならない。本稿の第1章で論じたように、中国語学習誌という体裁の出現は、中国語の講義録と「講座物」の延長線で捉えるべきで、中国語学習関連の情報の流通を加速化したメディアであった。換言すれば、1930年代に創刊された一連の中国語学習誌は、文部省検定済みの教科書とは異なり、学校外で一般人によって使われ、あるいは学校の補習教材とされていた場合が多かったと考えられる。このような中国語学習誌の発行・販売、購読の様態、すなわち商業雑誌としての特徴から考えれば、市場や読者による受容が雑誌の発行ないし内容面に影響していたという側面は看過できない。

1930年代以降に学習誌が次々と創刊されていった事実から考えれば、中国語学習者という潜在的な一般読者が少なからずいたと推測できるが、すべての学習誌の刊行が順風満帆というわけではなかった。表1に示したように、『華語新声』（文求堂）、『支那語雑誌』（春陽堂）、『新興支那語』（尚文堂）の3誌は、創刊されてから1、2年間で休刊に追い込まれた。ほとんどの雑誌は休刊の理由を明記しなかったが、売れ行きの低迷や資金の不足といった経営難が大きな要因の一つだったと考えられる。例えば、1922年に北京で発行され、一年後に休刊になった『支那語雑誌：白話』の編集者は「休刊告白」でその理由を、「当初の予想は惨めに外れてタツタ二百部しか出ませんでした」<sup>(49)</sup>と記した。雑誌の発行を継続するために順天時報社の援助も受けたが、印刷所への借金もあり、「貧乏世代の為め 東京大阪の大新聞に一覧の広告すら登載し得ないと云ふ経済上の拙劣」<sup>(50)</sup>があったと書いてあるように、日本国内での販路もうまく開拓できなかったようである。

このような1930年代の激しい中国語学習誌の競争のなかで、1941年まで長く発行し続けた『支那語』は、とくに多数の読者の嗜好や関心と合致していただろう。1932年9月に外語学院出版部から『支那語雑誌』の第1号が発行され、1933年に『支那語』に改題された際には、「初級的なものばかりでなく中級に高級に言語学や文学的研究方面へも益々発展して行かなければならなくなりました。この本誌の使命を果す第一歩として先づ本号から「支那語」と改めることに致しました」<sup>(51)</sup>と宣言した。しかしながら、1933年に改題された当初に開設された「研究欄」や「言語学や文学的研究方面」<sup>(52)</sup>の内容がじきに減少し、宮越健太郎が翻訳し連載していた黎錦熙著「國語文法」などの専門的な語学の記事も1935年頃を境にほぼなくなった。1939年に『支那語』が発刊されてから8年目を迎えた時、編集部では「支那語の普及、支那語の大衆化を目指して歩み来つたことは今更言ふをまたざるところ、今日此の時世に際し一層それが強化をはかり所定の方針によつて邁進せんとしてゐる」<sup>(53)</sup>として、「支那語の普及、支那語の大衆化」を強調する形で雑誌の方針転換を明確にした。

『支那語』において「初級的なものばかりでなく中級に高級に言語学や文学的研究方面」の内容を改めて、「支那語の普及、支那語の大衆化」へと編輯方針を強化したことは、読者の希望に答えていったものであると考えられる。1938年頃から、『支那語』の読者欄に、受験生からの試験の参考問題についての注文が激増した。例えば、以下のような注文が見られる。

文検支那語科受験者のために指導的記事例へば試験問題並にその解答及び勉強法等を載せて下さい。(台南宮田・薛生)<sup>(54)</sup>

「試験に出さうな語句」「受験参考散語萃選」共に結構ですが各方面の試験問題の研究も是非取扱つて下さい、月々数問題中の若干文けでもよいと思ひます、尚ほ「散語萃選」に相對するやうな「日文華訳」もあつて欲しいと思ひます。(大連市・狭山生)<sup>(55)</sup>

前略私は大阪外語の別科二年生ですが将来支那語の実業教員或は支那語を以て身を立て度いと思つて居りますが如何なる方法で勉強し且つ如何なる書籍を読んだらよいでせうか。(一受験生)<sup>(56)</sup>

なるべく早く受験欄を拡張してく下さるやう願ひします、尚ほ懸賞問題でなくとも結構ですから例月のものよりも少し程度の低い問題を模擬試験として出してください。(台湾一受験生)<sup>(57)</sup>

読者の希望に対して編集部は、「日を追ひ月を逐ふて読者が増えるにつけ責任の愈々重且

つ大なるを覚え大いに為すあらんものと編集部では頑張つてゐます」<sup>(58)</sup>、「最近受験する方が多くなつたやうですから受験欄の拡張等の事も考へて居ります」<sup>(59)</sup>、「数々の御注文、誠に結構な事ですから来る四月号からなりとぼつ／＼実行いたませう。たゞ問題となるのは頁数ですが此の点当方関係者寄々相談の上何とかきめ其上一応読者諸氏へはかることにいたします」<sup>(60)</sup>と読者欄で返事し、読者の満足がいくように雑誌の内容を調整するという意思表示を再三に行った。誌面から見れば、1938年頃からは受験の内容が明らかに増え、同年4月号からは「試験に出そうな語句」を連載しはじめた。同年12月号には「関東庁職員支那語奨励試験問題及び回答（乙種）」、同年の臨時増刊「実務翻訳号」には「康徳四年満洲国語学検定試験三等日文満訳回答」、1940年5月号には「憲兵支那語通訳試験問題及解答」「受験参考」をそれぞれ掲載した。このなかでも、満鉄学務課顧問を担当し満鉄の中国語試験に出題していた秩父固太郎が、執筆陣のなかで重宝されていたようで、彼による寄稿がしばしば誌面の先頭に掲載された。

読者を最大限に獲得するために中国語教本の市場に迎合する『支那語』の戦略は<sup>(61)</sup>、一般人向けの中国語講習会の開催と、外語学院出版による中国語教本の広告の誌面掲載という両輪によって強化されている。1938年頃、東京外国語学校と東亜同学会が主催した「外語支那語講習会」が、東京外国語学校を会場として定期的に開催されていた。参加資格は「男女・学歴・年齢を問はず」、会費は初級、中級の「各級共金五円」、「各級の教材は校内東亜同学会事務所にて実費でお頒ちします」という<sup>(62)</sup>。学費と教材費さえ払えば、学習誌『支那語』で執筆する各教師から直接に教わることができるというものであり、こうして東京外国語学校は万人に開かれる教室になった<sup>(63)</sup>。また、学習誌の『支那語』自体は、外語学院出版部から出版された中国語教本を商品として読者に売り込む広告塔の役割を果たしていた。1935年頃から、50頁ほどの雑誌の本体のほかに、常に10面以上の広告が刷られており、なかでも『支那語』に執筆する教師たちの著書が多数を占めていた。例えば、宮越健太郎、清水元助、杉武夫共著『支那語講座（全）附満蒙語会話』の宣伝文は、以下のように内容よりも装幀の美しさや世間の評判をセールスポイントとしたものである。「本書は短期支那語講座全三巻を各篇一纏めとして一冊として装幀を極美洋装とし、紙質を改良し、内容も更に改訂をほどこしたものである。本講座が異常な好評を博して居るのは今更言を俟ない。尚ほ本部は分冊を欲せらるる方の為には勿論これも用意して居る」<sup>(64)</sup>。

## 2 何のための中国語か—中国語教育・学習と中国研究の関係

それでは、学習誌や中国語教本の発行を商業的な成功と結びつけた『支那語』編集部は、いかにして自らの出版戦略を認識していたのだろうか。1938年5月の臨時増刊「実務翻訳

号」の編集後記では以下のように「支那語の学問的水準を高む」ことと、実用の中国語の普及とは、矛盾のないように語られていた。

吾々支那語に志すものは常に新しい時代に順ふて進まなければならない、今日は徒らに惰眠を貪つてゐる場合ではない、吾々は如何にして支那語を学問的に分科的により深く研究して支那語の学問的水準を高むべきかに就いて奮起しなければならないと同時に実用支那語の本質とは如何なるものであり如何にして研究すべきかに就いて能ふ限りの努力を惜しんではならない時であると思ふ。

吾等同人はいづれも激戦にありながら現在は支那語研究の転換期にあることに對し深き認識を有して実用支那語に熾烈なる熱意を持つてゐる、さらば読者諸氏よ暫く借すに時日を以つてし吾等の主張の具体化を凝視せられよ、吾等は必ず諸氏の期待に背かざらんことを誓ふものである。(S生)<sup>(65)</sup>

六角恒広は、「昭和の時代に入ると、昭和六（一九三一）年のいわゆる「満洲事変」を始め、六年後の「日華事変」そして第二次世界大戦へと戦争が続いた。そのような環境のなかで中国語は一種の黄金期を迎えた。それを反映して中国語の学習雑誌も多く刊行されたが、その八、九割は発刊しては消え、消えては発刊し、というありさまである」と論じ、学習誌の隆盛を中国語の「黄金期」の「反映」として捉えた<sup>(66)</sup>。しかし、それは当時の風潮のいかなる側面を、いかに「反映」したかということについて、さらなる解釈は行われなかった。藤井省三は、学習誌『支那語』（外語学院出版部）に代表される「中国語教育は侵略のための工作となるいっぽうで、同時代中国文化の紹介も継続した」<sup>(67)</sup>と指摘し、さらに学習誌『支那語と時文』の創刊号に塩谷温が綴った巻頭言を分析して<sup>(68)</sup>、「当時の言論統制の状況では、すでに中国侵略に批判的な発言は許されなくなっていた」というように、学習誌で提唱された中国語学習と、中国への侵略戦争とが表裏一体であったことを説明した<sup>(69)</sup>。

それでは、なぜ中国語学習誌が中国侵略を加担しながら、中国文化の紹介もしていたという矛盾するかのよう傾向があったのだろうか。また、批判的な発言が許されなかったことは事実であるとしても、そのような言論統制の状況において、わざわざ『支那語と時文』（開隆堂）、『支那語雑誌』（帝国書院）という新しい雑誌を発行し、巻頭言で中国語学習を奨励した意図はどこにあったのだろうか。このように、藤井の研究の議論に対してはさらなる検討すべき点がある。すなわち、実質上の侵略戦争と文化交流に関して、当時の中国語の教師と学習者がいかに中国語を認識しており、またその認識に基づいていかに行

動していたのかという主体性の問題である。例えば、別稿で既に論じたように、1938年に日本放送協会「支那語講座」ではすでに「日支の提携は言語より」の提唱があり<sup>(70)</sup>、ラジオ放送の公共性から考えると、建前であっても、中国語は侵略戦争のために学ぶ言語ではなく、友好と平和のための言語であるという認識もある程度日本社会で存在していたといえよう。

1930年代から学習誌の発刊と編纂に熱心に取り組んでいた中国語教師たちは、中国語学習の意義と必要性をいかに捉えていたのだろうか。もっとも注目すべきは、多くの学習誌において、中国語学習を通して、中国研究や中国文化の理解の改善を実現させようという理想が通底していたということである。1920年代までの帝国大学の中国研究において、中国語の教授と学習がしばしば軽視されていたことを考えると、1930年代の中国語学習誌で表明された志向は一層興味深い<sup>(71)</sup>。

たとえば、1931年に、外務省書記官の岩村成允<sup>(72)</sup>のもとで、奥平定世、神谷衡平、塩谷温、清水董三、宮越健太郎、宮島吉敏氏、宮原民平といった中国語教師、中国文学者らによって、「華語の研究並に普及を目的とする華語研究家」<sup>(73)</sup>からなる同人組織の支那語学会が東京で発足された。あわせて、同会の機関誌であって中国語学習誌の『華語新声』が創刊される。以下の創刊号の巻頭言は、同誌の革新性を表している。

言語の相違は国際間に一の牆壁を造る。(中略)日華両国は交歓実に二千年、然も今日に至つて仍然隔靴搔痒の憾があるのは、抑々何故であるか。

同文同種共存共栄の空言を唱ふる前に、お互が自由に語り合ふて隔壁なきに至り、熟知して捨て得ざるの心境に達することが必要である。

吾人は先づ彼の国の言話、彼の国の事情を研究しよふ。更に彼の江河の辺に培れた燦然たる古代文化の深奥を探ろう。是が吾人の研究の全部であり、本誌の目的の全体である。<sup>(74)</sup>

さらに『華語新声』創刊号の編集後記には、以下の文言も見られる。

埋もれた支那語文化の再吟味を為す！夫れが本誌の使命である。シエイクスピーアーやミルトンを支那に見出し、両江の辺に生まれた人類の源を、もう一度世紀の光に当たらしめるのは日本人に否アジア人に与へられた大きな使命である<sup>(75)</sup>。

無署名で書かれた以上の巻頭言や編集後記では、雑誌の目的と使命の異なる側面が強調

されているが、いずれも中国語だけに目を向けているというわけではない。巻頭言では、「彼の国の言話」を研究して、それを通して中国古代文化の深奥といった「彼の国の事情」を研究することが目的とされた。編集後記では、「支那語文化」にあった、シェイクスピアやミルトンに劣らないような価値を認めて、その「支那語文化の再吟味」が「本誌」及び「アジア人に与えられた大きな使命」だと述べた。もちろん、「支那語」という当時の一般的な呼び方を流用するのではなく、わざわざ「華語」を題名としたのも、「支那」のことばではなくて「中華」のことばを学ぶという意味合いを盛り込もうとしたのだろう。

『華語新声』の創刊号の誌面には、南京国民政府が1928年に公布した国音を紹介する「北京語は支那の標準語なり」（東京外国語学校教授・神谷衡平）や、「支那文学」を理解するためには音節・音調が重要であると説いた「支那文学の重要性」（大林一之）、さらに「児女英雄伝講義」（拓殖大学教授・宮原民平）といった、2、3頁ほどの短い中国語、中国文学関係の論考が掲載されており、創刊号の巻頭言で示された中国語教育・研究に対する思考や反省の意欲と呼応していた。

また、1939年に創刊され、大阪外国語学校支那研究会（1941年に大阪外国語学校大陸語学研究所と改名）によって編纂されていた『支那及支那語』も、「支那語学再建と全面的支那研究」に寄与する責任について、以下のように述べている。

従来支那学とは専ら所謂漢学を指すかの如く取扱われ他の一般的研究は却つて軽視せられ来つた結果、基礎的學術研究に於て欧米の後塵を拝する（中略）支那語学再建と全面的支那研究への努力の責任であり正しき支那語と囚はれざる支那知識の普及への努力の義務である。この小雑誌はかかる見地よりして諸物質節約を要する時期に拘らず敢へてする意義十分ありとの確信を以て創られた。「使へる支那語とあるがままの支那の追求」。この一句こそ我等の態度の端的な表現である。<sup>(76)</sup>

上記の「従来支那学とはもつぱら所謂漢学を指すかの如く取り扱われ他の一般的研究は返つて軽視された結果、基礎的學術研究に於いて欧米の後塵を拝する」<sup>(77)</sup> というように、支那学の疲弊という問題が、すでに議論の俎上に載せられていた。1943年8月号の『支那語雑誌』（蜚雪書院）においても、漢学界に対する反発的な発言が見られた。具体的には、漢学界の「親の光り」の風習を支那語学界に持ち込まないように訴えるものであった。

「親の光り」「師の光り」—それは尊ぶべきものではあるが、むやみに誇るべきものではなく、ましてそれに頼り切るべきものではない。同時にまた、親や師としても、

子や弟子ばかりを愛顧したり、或はこれを以て自家の防壁とすることは、もはや時代に合はなくなつてゐる。由来漢学界—及びそれに親近性のある支那語学界—は、その対象や環境との特異性の故に、封建制を脱却することが比較的におくれてゐると言はれるが、今後の学界においては従来と變つて、天下の子弟を公有とする態度が取られなくてはならない。<sup>(78)</sup>

同号の編集後記ではさらに以下のように、中国語学の再建を熱弁している。

ある人に言はせると、支那語は「通弁語学」だといふ。なるほど、過去に於てはそういふ時代もあつたであらう。しかし現在多くの少壮支那語研究家たちの間には、もつと科学的にこれと取り組まうという真剣な努力があるのだ。(中略)

支那語の文法的構成、それ自体の中に、支那人の理論があり、思想があり、歴史がある。/(中略)支那に於て、支那的な考へ方が分析され、研究されるべきであらう。/それには、この「支那語」を新しい意味で見直さなければならぬのだ。その支那語を、立派な語学として登場させるためにも、我々支那語に些かたりとも関係ある者は余程覚悟するところがありたいものだ。<sup>(79)</sup>

ここからは、支那学と漢学界に対する不満の心情が、学習誌に携わった中国語教師の間で共有されていたことがわかる。それと同時に、「通弁語学」と呼ばれる中国語を見直し、科学的な研究を通して中国語学を「立派な語学として登場させる」という責任も意識されていた。学習誌で語られた上記のような種々の理想を、戦争の遂行のために作った大袈裟な言い分だけとして捉えるのは不十分だろう。

以上のように、『華語新声』（華語新声社）、『支那語』（外語学院出版）、『支那及支那語』（宝文館）、『支那語雑誌』（蛭雪書院）の巻頭言や編集後記を誌面の記事を併せて分析した結果、中国語教育の向上という目標に留まらず、「支那語文化」や「支那語研究」を多く意識し、中国語学に貢献したいという志向があつたことがわかつた。戦前の中国語学習誌の最大といえる特徴は、自らの雑誌が学習誌でありながら、中国語の研究誌、中国語の文化と事情を紹介する雑誌でもあるという多重的な自己規定を持っていた点だといえよう。

たしかに学習誌は、「親や師としても、子や弟子ばかりを愛顧したり、或いは之を以て自家の防壁とする」というように批判された漢学界と比べれば、「天下の子弟を公有とする」という目標に適している体裁であるが、後述するように、中国語学習の普及を通していかに中国語研究ないし中国研究の改善を実現させるかという問題は残されており、当時の学

習誌においてその方策が十分に提示されることはなかった。中国語の学知において起きた大きな地殻変動が実を結ぶのは、戦後、倉石武四郎らが着手した中国語教育ないし中国研究の改革を待たねばならない。しかし、そのような改革への期待が戦時中の中国語学習誌のなかですでに萌芽したことは、改めて認識しなければならない。これらの雑誌は、編集方針の転換や経営の困難といった屈折によって変貌することがあったとしても、すくなくとも創刊当初、中国語学と中国研究に貢献するような理想を内容編成においても実践しており、中国語文学や中国語学の分野において専門書の翻訳がまだ少なかった当時、同時代中国の国語運動や文字改革、中国文化界の状況を日本に伝達する初歩的な「翻訳」の媒体として機能していた。

### Ⅲ 学習誌と学術誌の狭間に生まれた〈声〉の教育法：

#### 『支那及支那語』を中心に

---

前章で論じたように、創刊当初、中国語学と中国研究に貢献するような理想を内容編成においても実践されていたが、宮越健太郎が主幹の『支那語』のように、読者の要求に応じて「支那語の普及、支那語の大衆化」へと編輯方針を改めた場合もあった。中国語学の研究と中国語学習の普及という板挟みのなかで、「研究」のあり方を模索することを通して新しい教育法が見出されていった事例を本章では論じる。

当時の中国語教育者が抱えていた困難について、1937年頃に『新興支那語』を出版していた奥平定世は、次のように記している。

雑誌発行は一つの啓蒙運動の手段である。利益中心のものもあれば又学術研究発表のものもある。われらはこの啓蒙運動を第一の主眼とする。今までに支那語を学んだ経験のない人に対しても、又学習しつつある人に対しても、亦それと同時に習得したと自認する人に対しても。反つて亦我我一同が自ら省顧する機会として自らの蒙を啓くためにも。

われわれは、学界画期的な研究を発表したい。又その努力は拂つてゐる。然し性来の愚鈍、世の所謂大家の持ち得る程の自信はない。自ら以て斯く任ずる仁は最近の満洲案以来丁度今頃の筈、雨後の如くに出てゐるが実にその毅然たる。又壯。但し若竹の優雅なきが淋しい<sup>(80)</sup>。

「学界画期的な研究を発表したい。又その努力は払つてゐる。然し性来の愚鈍、世の所謂

大家の持ち得る程の自信はない」とあるような中国語研究を進めるうえでの苦渋は、他の多くの教師たちも味わっていた。この傾向はとくに、大阪外語支那語部が編纂した『支那及支那語』に顕著に見られる。本章では、明治以来日本の言語学研究と中国語研究の発展状況を踏まえた上で、『支那及支那語』誌上における研究志向の難航とそれへの対処を、中国人研究者の学術論考の翻訳や、時局下における日本国内の中国語学習と中国語研究を調和させるような「音声学研究」の模索から分析する。

### 1 中国語研究の困難とその対応—中国人による語学研究の「翻訳」

『支那及支那語』は1939年に大阪外語支那研究会によって編纂され、東京の宝文館によって発行された中国語学習誌・同人誌である<sup>(81)</sup>。創刊当時から1942年までの執筆陣は主として、吉野美弥雄、関恩福、金子二郎といった大阪外語支那語部の教員らと、「支那研究会員」の大阪外語支那語部関係者ら、また各地の高等商業学校の教員ら<sup>(82)</sup>から構成されていた。創刊当初、『支那及支那語』の編輯者の間では、「支那語学再建と全面的支那研究」に寄与する責任や「使へる支那語とあるがままの支那の追求」、「支那語と囚はれざる支那知識の普及への努力の義務」という意識が共有されていた<sup>(83)</sup>。ただし、「支那語学再建」や「支那語研究」という研究志向は、誌面においても実践されたが、今日にいう一般的な学術研究とは違いがある。

『支那及支那語』の誌面構成とその変遷を簡単に概観すると、以下のようにまとめられる。創刊号から1939年5月号までは、中国語の発音を考察する「研究」、中国の時事と民俗・文化を紹介する「談叢」、日本語文学の中国語訳、中国語文学の日本語訳を掲載する「翻訳」、中国語を講習する「小教室」、中国と中国語に関する書物についての批評、感想、紹介を掲載する「書架」といったコラムが中心であった。1940年以降、「用紙の配給制限がますます強化して来ました」<sup>(84)</sup>に伴い、初級者向けの学習内容はほぼ消えて、翻訳と語学の論考を中心的な内容とする中級レベルの学習者あるいは中国語教育者の同人誌となった。とくに1942年以降には研究的な志向が強まった。この時期に研究的な内容が増えるにつれて、高畑彦次郎<sup>(85)</sup>、吉川幸次郎、倉石武四郎、頼惟勤<sup>(86)</sup>といった帝国大学系統の執筆者が現れた。

誌面に掲載された中国語研究関連の記事は、執筆者による独自の中国語に関する論考と、語学論考や文学作品の翻訳の二種に分けられる。独自の中国語論考については次節で詳述することにして、まず、語学論考と文学作品の翻訳・対訳に関する記事としては、以下が挙げられる。林芙美子作・張健華訳「泣虫小僧」（1939年3月号など）、謝冰莹作・田村芳実訳「一個女兵的自傳」（1939年3月号など）、王力著・金子二郎「支那語学概論」（1940年

1月号から連載)、住田照夫「支那訳忠臣蔵」(1940年1月号)、謝冰心作・倉石武四郎訳「乙女の旅より子供の国へ」(1940年2月号)、芥川龍之介・魯迅訳「羅生門」(1940年6月号など)、胡適著・金子二郎訳「国語文法概論」(1941年6月から連載)、胡適著・金子二郎訳「国語文法研究法」(1941年8月号から連載)、黎錦熙著・小田信秀訳「国語運動史略」(1941年12月号など)、趙元任著・編集部訳「北京語の語調の研究」(1942年5月号)、陸志韋・金子二郎訳「支那語と西洋語に於ける動詞用法の比較」(1942年8月号など)、趙元任・編集部編「中国方言に於ける破裂音の種類」(1942年8月号)、羅常培・編集部訳「現代支那方言研究の展望」(1942年9月号)、劉復「四声変化実験の一例」(1942年9月号)、カールグレン著・高田久彦訳「現代支那方言の記述音声学」(1942年12月号から連載)、黎錦熙著・倉石武四郎、伊地智善継訳「比較文法」(1943年1月号から連載)。

とくに1942年頃から、大阪外語支那語部の後身である大陸言語研究所からの独自の論考の数が減り、同時代中国の国語運動で活躍していた言語学者の論考が数多く翻訳されていった。1943年の『支那及支那語』の総目次の分類によれば、「中国語学」の記事が総数の半分を占めており、そのなかの大半が同時代の中国語学の論考を翻訳するものであった<sup>(87)</sup>。『支那及支那語』の編集部は、翻訳が日本の中国語研究を深めるのに不可欠なプロセスであるとして以下のように語った。

自分は日本の支那学殊に支那語学に関してはまだまだ翻訳を必要とすると思つてゐる。就いては夫々の部門に於ける専門知識を有する人と翻訳能力を有する人とを一致せしめるやう、すなわち支那語の更に広い、深い普及が、ここに於ても亦必要缺くべからざることになつて来ると思ふ<sup>(88)</sup>

なかでも、前述した翻訳の記事のタイトルからみれば、民国期の中国語研究の成果を吸収することに一番熱心であったことは間違いない。1930年代後期、大陸言語研究所で行われた『支那語発音字典』の編纂作業でも、中国大辞典編纂処の『国語字典』、『国音常用字彙』、『北平音系十三韻』、中国国語促進会審詞委員会編『標準語大辞典』を大いに参考したという<sup>(89)</sup>。1943年、同研究所は黎錦熙の『国語文法』を翻訳し、『黎氏支那語文法』として刊行したが、黎氏の文法は「図解法」として名高く、戦後日本の教育現場でも多く使われた。

中国語研究者の王力が、中国語学研究の学術史を概説する『中国語言学史』において、民国期の中国語研究とその代表的な研究者を①語法研究(馬建忠、楊樹達、黎錦熙、王力、呂淑湘、高明凱)、②カールグレンの方法をもとに上・中古音を研究する歴史言語学(李方

桂、趙元任、羅常培)、③方言、少数民族の言葉などを扱う記述言語学(羅常培、趙元任、劉復)に分類したということを考えれば<sup>(90)</sup>、『支那及支那語』で翻訳された論考の作者たちは、同時代の中国の研究動向をつぶさに観察し、そのなかで影響力があり、かつ優れている研究の所在を理解していたということがわかる。

他方、同時代の中国で行われた中国語研究を積極的に取り入れる翻訳の作業は、日本における中国語学の停滞に対する無力感に動機づけられたものでもあった。『支那及支那語』が刊行されてから時間がたつにつれて、若い編集者と執筆者から不満の声が高まった。

日本のこの学問の一般状態も、やはり不満足なものであつた。それが証拠に、論文一つ載せられなかつたのではないか。率直にいわねばならぬ。実のところ、私たちは、必要なかつ時間の要する仕事をもっている。もちろん、雑誌に載せられるも底のものではない。いま時、こんなちつづけな雑誌ではあるにしても、もつと紙面を一般の研究者に利用してもらはねばならない。<sup>(91)</sup>

『支那及支那語』の原稿収集がつつい手近なところで間に合わせるようになったのは、「必要なかつ時間の要する仕事」があつたためだという。ここでのいわゆる仕事は何を指すのかは明言されていないが、時局下にあつて「国策語学」に格上げにされた「支那語」が、「文化語」ないし学問としての前途があるのかどうかということについて、以下のように、一読者から疑問が呈されたことさえある。

今日幸か不幸か、日本に於ける支那語は今次事変を契機として一段の進歩<sup>マ</sup>を來した。現在支那語学者と呼ばれる者は心中快哉を叫び、日に寸暇無き多忙な日を送つてゐる。政府は国策語学のナンバーワンとして、大いに奨励し現在凡そ支那語を語る<sup>マ</sup>ものは行くとして、可ならざるなき勢を示してゐる。幾多の講習会速成講座が雨後の筍の様に創立され、支那語はこゝに過去の隱忍から、見事榮冠を贏ち得たかの觀を呈した、吾人はその多幸を願ふものであるが、果たしてこれで実を結んだと言へるであらうか。<sup>(92)</sup>

別の投書においても、「満洲事変直後一時所謂支那語熱なるものは勃興したが、これも東の間、熱し易く冷め易い日本人の性質を此処でも見せつけられた」<sup>(93)</sup>とあるように、時局下で生まれた中国語ブームの疑わしさには抵抗を示しつつ、中国語研究の方法論における行き詰まりは容易に打開できないという感覚が共有されていた。当時、執筆者の一人で「支

那研究会員」であった大原信一<sup>(94)</sup>は、「我国の支那語は神学的と呼ばれる最初の段階から脱しきつてゐない」という「支那語の貧困」を指摘して、「支那語が社会的に虐待され、言語学者といはれる人々も何故かこの豊饒な沃野に鋤をいれることを欲しなかつた間に、科学的な方法に武装した碧眼紅毛の一群が一步を先じてしまつたことは口惜しき限りであつた」と嘆いている<sup>(95)</sup>。

19世紀に欧米で研究が進んだ比較言語学は、「博言学」として明治期の帝国大学文科大学に導入されたことはあるが、中国語学の研究については、卒業生であった後藤朝太郎と高畑彦次郎、胡以魯が行つた研究以外、研究の規模は全体的に低調のままであつたといえよう<sup>(96)</sup>。そして、それ以降、中国語研究をめぐる制度上の知識環境には大きな変化がないまま1940年代に至つた。それに対して、中国では清末民国期にヨーロッパの近代言語学と中国の伝統的な言語学との融合を試みる言語学研究がすでにはじまつていた。このように見れば、『支那及支那語』の誌面において、同時代の中国で行われた語学研究を精力的に翻訳していたことは、中国語をめぐる全体的な知的環境に対する自覚と反省に基づいた動きであつたといえよう。

## 2 「支那語らしい支那語」と音声学志向の教育法

前述したように、『支那及支那語』における中国語学の研究は主として翻訳に頼らざるを得なかつたが、それでも独自の論考も掲載されていた。そのなかでも、本節では、とくに「音声学研究」の周辺での模索が、戦前の中国語教育実践にもつ革新的な意味を持つていたことを、人脈的なつながりにも留意しつつ論じる。

『支那及支那語』に掲載された独自の中国語学に関する論考としては、金子二郎「支那口語文法序説」(1939年6月号など)、吉野美弥雄「同字異義の研究」(1939年9月号など)、金子二郎「支那語の記音法」(1940年8・9月号)、富田竹二郎「ウエード式記音法の再検討」(1940年8・9月号)、魚返善雄「表音法再談義」(1940年10月号)、高畑彦次郎「支那・チベット語族と南方語族に對する支那語の言語学的寄與」(1942年4月号)、編輯部編「支那音韻学用語解」(1942年5月号など)、編輯部編「北京語の声調研究」(1942年5月号など)、伊地智善繼「いわゆる「輕声」についての諸問題」(1942年7月号)、伊地智善繼「支那語教授法への反省と一つの試み」(1942年9月号)、高倉正三遺稿・吉川幸次郎「蘇州話訳稿」(1942年11月号)、小田信秀「黎錦熙小伝」(1942年11月号)、伊地智善繼「琉球写本官話問答」(1942年12月号)、大原信一「「重念・輕声」と強さアクセント」(1943年3月号)、小林武三「支那語文法の基礎的探究一言語本質への素朴な反省」(1943年4月号)、大原信一「支那初級小学国語読本の語彙調査」(1943年7月)といったものが挙げられる。

以上のように、「口語文法」「北京語の声調」「蘇州話」「軽声」「重念」といった〈声〉の中国語にかかわる研究課題に大きな関心を示しつつ、文法論、国語運動史、語彙調査といった広範な研究領域にも目を配っている。たしかに、4、5頁ほどのこれらの論考は、全体的としてまとまった体系を構成していたわけではなく、明確な方向性があったとも言いがたい。ただ、中国語の文法書や音声の教育法が極めて乏しかった当時、中国語界において革新的かつ意欲的な試みであったことは間違いない。

「支那語月刊講座」として自己規定していた『支那及支那語』は、初学者の学習のための「小教室」といったコラムを設け、大阪外語で夏季講座を開設したこともあるなど、実践的な中国語教育にも取り組んでいた<sup>(97)</sup>。〈声〉の中国語の教育法に高い関心があったことは、「語学教授の方法」「方言」「発音記号」「“聴”と“説”」「日本人の支那語」といった巻頭言から見て取れる<sup>(98)</sup>。「日本人の支那語」というタイトルを取った巻頭言では、日本の対中感情について、「親しき中に垣をせよ」と云ふが、親しきに過ぎて狎侮して居ることは事実である」と批判し、中国語の学習法についても、「文字が同じいから文字を眼の方から先きに覚えてしまつて、その発音と調子を疎かにすると言ふ風がある」という「眼と頭で知つてゐる」ことの弊害を指摘した上で、「支那語を学ぶには袴を着けた様な気持ちを捨てて、支那服を着て声楽でも稽古する気持になつて、支那人をよく真似て繰返し繰返し練習」する方法を推奨した<sup>(99)</sup>。

〈声〉の中国語を重視する『支那及支那語』及びその発行元である大阪外語支那語部の姿勢は、大阪外語支那語部教授の金子二郎<sup>(100)</sup>及び同部卒業生の伊地智善継<sup>(101)</sup>と、京都帝国大学教授の倉石武四郎との人脈的なつながりからも理解できる。1930年代到北京留学から帰国した倉石は、中国服を着て京都帝国大学の教鞭を執る風変わりな「伝説」的人物として知られていた<sup>(102)</sup>。伊地智は1939年に大阪外語を卒業してから商社に入社し、天津支店に配属されたが、まもなく辞職して帰国したばかりの頃に、金子に連れられて倉石の自宅を訪問した<sup>(103)</sup>。倉石による中国人作家・謝冰心『寄小読者』の翻訳のプリントを、金子が読んで感銘を受けたことが、この訪問の契機であった<sup>(104)</sup>。このことを機として、倉石が『支那及支那語』の編集指導を行うことになり、また伊地智が倉石のもとに弟子入りすることにつながった<sup>(105)</sup>。それまで、「古典ばかり」の帝大系と「現代語か現代文学しかやらない」外語系の間には隔たりがあったが、ここにおいて両者が接触する契機が生まれた。

伊地智は1940年に京都帝国大学中国語学文学選科に入学し、「青木正児先生の「支那文学史」の講義と「桃花扇」の演習を受講し、倉石先生の「支那語学概論」の講義、黎氏「比較文法」の演習を受講した<sup>(106)</sup>と回想する。1942年に大阪外語助教授に任命され、京都帝国大学を退学することを余儀なくされたが、帝国大学の講義を熱心に傍聴し続けた<sup>(107)</sup>。伊

地智が『支那及支那語』で執筆活動を続けた時期は、彼が京都帝国大学で言語学関連の講義を受講した時期と重なる。同誌に掲載された最初の文章である「いわゆる「轻声」についての諸問題」（『支那及支那語』1942年7月号）は、倉石が推薦した趙元任の諸論文に感銘を受けて書かれたという<sup>(108)</sup>。この論考では、「重念」と「轻声」という中国語の細かい音感・イントネーションの問題を取り上げ、「これが支那語の教育体系として、極めて便宜的な方法であり、かつ理論的な整理方法であることを結論したい」と論じている<sup>(109)</sup>。さらにいえば、1943年に1月号から連載されていた黎錦熙著・倉石武四郎、伊地智善継訳「比較文法」も、上記の回想で言及された「黎氏「比較文法」の演習」の受講を契機としたものだという可能性が大きい。

以上のように、『支那及支那語』の雑誌の指導や、伊地智と倉石の執筆活動を通して、倉石に代表される帝大系の言語学や音韻学の研究動向が、大阪外語支那研究会に伝わったことがわかる。倉石は、1940年頃に中等学校の中国語教育のために注音符号の「総ルビ」を注記した『倉石中等支那語』（巻1～巻3）を編纂するとともに、兵庫県立豊岡中学校や、京都市立第二商業学校、徳島県阿波中学校で、それらの教材を発音の教授に応用した効果を実験的に観察していた<sup>(110)</sup>。およそ2年後の1942年夏、倉石の教育実践を直接参照した証拠こそないものの、大阪外語のキャンパスで行われた初学者向けの夏季講座においても、注音符号を使い、中国語発音の新しい教育法を試みる実験が行われた。金子らは15人の初学者に、①漢字を使わずに注音符号を教える、②音の最小単位を字音としてではなく語音として教える、③音調の細かい解釈は最初にしないう漢字の発音を教える旧来の教授法と異なる方針で実験した。『支那及支那語』に掲載された報告によれば、その結果は「極めて有望で」あり、「大部分の者が教本に出て来た言葉は立派な支那語（暗誦式や粒読式ではない）としてつかんでしまった」という<sup>(111)</sup>。同誌の編集後記では、漢字の発音を教える旧来の教授法の問題点と、教育に対して実験音声学がもつ意義を以下のように強調した。

従来の訳読主義が外国語教授法として無力なことは最早誰も気づいてゐる所であるが、さて新しい方法となると、実際教授に応用すべき科学的基礎理論が我が支那語界には正直な所全くない有様である。これは我々日本人の手によつてどうしても早く実験音声学的メスが支那語に加へられねばならないといふことになるのであるが、今の所せめてもの参考にと思つて本号に劉復の実験を紹介してみた。これは彼の郷里江陰方言であるが、北京語についてもこれぐらゐの実験結果をなるべく早い時期に持ちたいものだと思ふ。<sup>(112)</sup>

さらに、同号に掲載された伊地智善継「支那語教授法への反省と一つの試み」(1942)は、音声学を必要とする理由について、同時代中国の言語生活は変化が激しいため、旧来の訓読法や会話を重視する「華語会話」はいずれも誤訳が非常に生じやすい点にあると訴えた。彼は黎錦熙の「国語教科書」を参照して、「(引用者注：黎錦熙は)現在の支那語が、非常に変換期にあることを認めてゐる。新しい文明の生活技術が、支那語に変容を強制したためである。「新名詞」が大量に輸入され、古い用語が新しい意味をもつて再生し、支那語学者が西洋流文法の適用を警戒するとしなにかかはらず、インテリの白話(語文ともに)は、西洋風日本風に変化しつつある」ため、「古い支那語教科書の支那語が、いかに淘汰されねばならぬかを、われわれは考へねばならないのである」と述べた<sup>(113)</sup>。このように、「支那語がいかに古い歴史をもつた言語であるとしてもそれが言語として完成されたまとまつたものと考えられるとは不可である。単音節語が膠着語の方向に変化しつつも、文字の形態に制約されて、特異な現象をもつたものであることを、個々の現実の実態に即して直視すべきである」<sup>(114)</sup>と論じたうえで、中国語教授法の改革として、字の発音を教えることから「詞」〔引用者注：ここでの「詞」は中国語で、文のなかで意味を持つ最小単位を表す日本語の「語」あるいは「単語」の意味に近いと考えられる〕の発音を教えることに転換し、音韻論の語学研究を行う必要性を説いたのである。

これらの中国語教授法の根本的な変革に対する意思表示は、しばしば「科学的」や「実験」といった言葉と合わせて表されていたことである。ここからは、日本社会における非科学的中国語受容に対する不満、そして世間で高く評価される先進的な欧米語学に抱いた劣等感を読み取れる<sup>(115)</sup>。

1943年に、『支那及支那語』は『支那語文化』に改題された。その理由について編輯後記では、「現代支那語の科学的研究を主とする傾向から、より一般的な支那語文化全般を問題とする方向に転換することを研究してみた」<sup>(116)</sup>と記されている。雑誌の編集方針が研究誌・学術誌から「支那語文化全般」の内容へと軌道修正されたことに伴い、太平洋戦争下における用紙統制とも相まって、雑誌のページ数は激減した。改題された「支那語文化」の内実は極めて曖昧であり、雑誌の研究志向はこの時期に頓挫したと言わざるをえない。それでも、『支那及支那語』ないし大阪外語支那研究会が、中国語の研究と教育の間で音声学的な教育法を探究していった当初の試みは、戦前の中国語研究や中国語教育の革新性として評価すべきであろう。

本章では以上の考察によって、『支那及支那語』における研究志向が、純粋な学術研究というよりは中国語教育の方法論に近いものであったが、そのなかで中国語教育法の革新のための理論的な探究が深められていったことを明らかにした。さらに、大阪外語支那研究

会と京都帝国大学教授・倉石武四郎の学術交流によって、新しい中国語の教授内容と目標が生まれた経緯を考察した。これらが教育体制の中への全面的な〈声〉の教育法の導入への模索につながっていく経緯は、岩村成允がリードした支那語学会や、倉石武四郎の動向をさらに追っていく必要があるが、このことについては稿を改めて論じたい。

## おわりに

---

本稿は、戦時中の日本国内における中国語学習ブームを支えたものは何であったのかという問題意識をもとに、戦前の中国語学習誌を、日本国内の中国語教育及び、中国語教育と中国研究の關係の史的再考を行う基礎資料として考察してきた。1930年代に学習誌を編集し出版した中国語の教師たちの多くは、中国語の普及や中国語学の再編を目指すという理想を抱いており、彼らによって編纂された学習誌も、文化誌・翻訳誌・研究誌という多重的な性格をもっていたということが判明した。『華語新声』、『支那及支那語』、『支那語雑誌』でしばしば語られた、中国研究や中国文化の理解に資するような中国語学の再建は、戦後における中国語教育の改革実践につながる思索の連鎖の原点の一つであった。中国語学習ブームと中国語学習誌の創刊、刊行との關係については、学習者の市場があると予想して雑誌を創刊した『白話』や『支那語と時文』、受験生の要望に寄せて編集方針を改めた『支那語』、読者に啓蒙を与えようとした『新興支那語』、中国語学と中国語教育の融合を模索し続けた『支那及び支那語』の存在からわかるように、侵略戦争に加担していたというだけでは語りつくせないほどの複雑性があったし、「戦争語学」「通弁語学」という当時の呼称に強い嫌悪感を覚える教師もいた。その一方、時局の刺激を大いに受け、ないし戦時下のスローガンに積極的に呼応しながら、多くの学習誌が生まれたのも確かである。学習誌はこのように、戦前期の中国語ブームに組み込まれたものであると同時に、中国語学の隆盛や改革のためにその実践を一般世間にもとめ、中国語学習のブームを自ら積極的に作り上げていたといえよう。

中国語の研究・教育・学習の全体を俯瞰できる資料として、戦前の中国語学習誌の資料的な価値をさらに提示するならば、以下の二点が挙げられる。まず、内容面での連続性があり、執筆者の肩書などが明記された中国語学習誌は、特定の学校や教師を超えた各教育・学習の場を連絡する中国語の「界」を考察する手がかりとなるだろう。例えば、本稿の第3章では、『支那及支那語』と執筆者の文章、回想録とを併せて分析し、「帝大系」と「外語系」が合流していった実態をある程度明らかにした。東京外語支那語部の雑誌『支那語』の執筆陣には、旅順工大予科教務や、満鉄学務課顧問といった外地の中国語教師も加わっ

ており、このような戦前の中国語教育の場における内地と外地の連絡も注目に値する。第二に、日中間の同時代性を意識した中国語教育の方法論や中国語学のグローバル・ヒストリーを構想していくための素材にもなる。学習誌という紙媒体には、中国語を教える記事が多く掲載されており、そのなかで中国語の発音が発音記号によっていかに記されていたのかということが、戦前の中国語教育の音声的な復元の手がかりになりうる。当時の教師の肉声を記録した音声的資料はほとんど残されていないが、教師が使った発音記号や表記の方法、また教師ごとの使い方の差異から、中国語教育の現場の〈声〉をある程度把握することができる。

昭和戦前期に創刊された一連の中国語学習誌は、いずれも1944年頃までに休刊・停刊となったが、同年に休刊となった学習誌『支那語雑誌』の復刊として、戦後、早くも1946年に帝国書院が『新中華』と改題したうえで中国語学の専門誌の刊行をはじめた<sup>(117)</sup>。その巻頭言である「華語の回復」において、戦前に「我々の一部が支那で如何に非人道的であつたか」ということを反省するとともに、戦争に順応した中国語の関係者である「我々が帝国主義のお先鋒たるべく、支那語を学んだのは、昔の苦い思ひ出となつた」という負の歴史を自ら書き記した<sup>(118)</sup>。「戦争は終わった。自由と真理が強権に打勝つ日が来た」<sup>(119)</sup>とあるように、占領期の民主主義、ヒューマンイズムの宣揚から影響されたものでもあろうが、戦時下の学習誌の編纂と刊行が、自らの行動をある程度自覚しながら行われたということの告白だといえよう。また、各教師が中国語の記事を執筆し、それを学習誌に掲載させるという戦前期の誌面の形は、戦後の倉石中国語講習会から派生した中国語友の会が発行した雑誌『中国語』にも見受けられる。直接参照していたかどうかは判断し難いが、戦後の『中国語』もまた、戦前の学習誌と同じく、大衆レベルでの中国語普及の機能をもっていた<sup>(120)</sup>。この意味で、戦前の中国語教育の遺産がいかに戦後に受け継がれたかという問題は、もう一つの興味深い検討課題である。

## 註

- (1) 温秋穎「日本放送協会「支那語講座」のメディア史（1931–1941）—他者の言語はいかに想像されたか」『メディア研究』第101号、2022年、119–136頁。
- (2) 例えば、東京外語教授の内之宮金城は「とりわけ満州事変以後、支那語を勉強される方々は、何と幸せなことかと真実羨ましく思はれてなりません。我国学者の労作に係る相当信頼出来る、手ごろの大きさの字書が、割合安価に求め得られるやうになつたから」と述べたことがある（『支那語学習法』『支那語』第7年第4号、東京：外語学院出版部、1938年、32頁）。
- (3) 六角恒広の考察によれば、明治から1945年にかけて発行された読本、文法書、時文、辞典といった1474点の中国語教本のうち、約5分の3は昭和戦時期に出されたものである（六

- 角恒広編『中国語関係書書目（1867-2000）』東京：不二出版、2001年）。
- (4) 戦前期に吹き込まれた中国語学習のレコードとして、青柳篤恒『レコード添付実用北京語速成講座』（レコード10枚）、秩父固太郎（1934）『初等支那語レコード』、倉石武二郎・傅芸子（1938）『支那語発音編』、徐仁怡吹込（1940）『実用支那語レコード』（レコード12枚）が挙げられる。学習カードとして、本田清人編『学習必携 支那語カード』大阪屋号書店、「カード兼用日用支那語かるた」が挙げられる。氷野善寛「昭和初期の子供向けの中国語教材の一端：めんこ・かるた・新聞」『関西大学東西学術研究所紀要』第53号、209-229頁も参照。
- (5) 1938年から1941年にかけて、日本放送協会ラジオ番組の「支那語講座」は同局で放送されていた「英語講座」と第1位を争うほど高い聴取率を獲得し、1940年度には「支那語講座」のラジオテキスト発行部数（40,105部）が英語講座を追い抜いた（日本放送協会『ラジオ年鑑 昭和17年』東京：日本放送出版協会、1942年、137頁、日本放送協会『業務統計要覧 昭和15年度』東京：日本放送協会、1941年、237頁を参照）。
- (6) 安藤彦太郎『中国語と近代日本』東京：岩波書店、1988年。
- (7) 桜井隆『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など』東京：三元社、2015年。
- (8) 藤井省三『東京外語支那語部—交流と侵略のはざままで』東京：朝日新聞社、1992年。
- (9) 鳥井克之「戦前の所謂『支那語』雑誌について」中国語教育研究会『中国語教育』第2号、1972年、19-20頁。
- (10) 同上、28頁。
- (11) 同上、53-54頁。
- (12) 「編集後記」『新興支那語』第2巻第7号、東京：尚文堂、1937年7月、50頁。
- (13) 「戦争語学」という呼び方に対する当時の不満として、支那語学会の機関誌『支那語学報』では以下のように書かれた。「由来支那語は戦争語学とまで酷評せられ戦時に於てのみ盛に行はれ、一旦戦争終局となれば直ちに衰微を來す傾向があつた。かくの如き状態であつたから学者も其の進歩發達を図る熱意に缺くるといふ憾みがあつた。併し今回の活気は一時的のものにあらずして永久的のものでなければならぬ。吾人は内外の状況に鑑み永久的發展性あるものと固く信じて疑はない。永久の發展を謀るにはそれに相当する機關を設けて不斷の努力を払はねばならぬ」（「創刊之辞」『支那語学報』東京：文求堂書店、1935年11月）。
- (14) 鈴木保昭「明治の英学雑誌—「英語世界」の果たした役割（1）」『日本英学史研究会研究報告』第59号、1966年、1頁。
- (15) 斎藤兆史『日本人と英語—もうひとつの英語百年史』東京：研究社、2007年、13-21頁。
- (16) 同上、16及び32頁。
- (17) 渡會貞輔「支那語雑誌小史（承前）」『支那語』第5年第3号、東京：外語学院出版部、1936年2月、19頁。
- (18) 六角恒広の考察によれば、中国語を含めて英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、朝鮮語の八カ国語の学習誌『外国語学雑誌』も存在した（六角恒広「附稿一「支那語」学習雑誌の消長」『中国語教育史稿拾遺』東京：不二出版、2002年、250頁）。
- (19) 「自序」『清語ト清文』第1号、1904年5月。
- (20) 渡會前掲「支那語雑誌小史（承前）」『支那語』、20頁。
- (21) 「本誌の意義」『支那語雑誌：白話』北京：白話研究社、1922年9月15日、1頁。

- (22) 松田かの子『華語月刊』と東亜同文書院の中国語教育」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第88号、2005年、166-154頁。
- (23) 例えば、石田卓生『東亜同文書院の教育に関する多面的研究』東京：不二出版、2019年、中里見敬「東亜同文書院の伝統的中国語教授法「念書」とその戦後における継承」『中国研究論叢』第22号、2023年、73-93頁などが挙げられる。
- (24) 黄子明「休刊告白」『白話』第12号、北京：白話研究社、133頁。
- (25) 宮越健太郎（みやこし・けんたろう、1885～？）：1905年東京外外国語学校卒業、日露戦争に通訳官として従軍、1906年に同校講師に採用され、1909年に助教授、1918年に教授に昇任、1945年退官。東京外語在職中、中国語教科書、参考書を多数執筆し、1931年から1937年にかけて日本放送協会東京放送局の「支那語講座」に出講。戦前の中国語教育界において影響力が大きい人物である。
- (26) 1933年に春陽堂の『支那語雑誌』が休刊になった後、『支那語』の表紙には「本邦唯一の月刊支那語雑誌」という宣伝文が掲げられた時期もあった。
- (27) 渡會前掲「支那語雑誌小史（承前）」、21頁。
- (28) 例えば、1930年代に早稲田大学付属第一早稲田高等学院分科で中国語を学んでいた安藤彦太郎は、当時の中国語授業の様子を以下のように述べた。「善隣書院出身で頑固一徹な老先生の渡俊治先生ひとり、テキストは学院3年間『急就篇』一冊、これを丸暗記させるのである。発音表記は旧式のウェード式一点張り、文法について質問しようものなら、「支那語に文法があるか」と大喝された」（安藤彦太郎「津田左右吉の愛弟子「郭明昆先生」の「民族の心」」『Decide = 決断 : business world & Chinese survey : magazine for decisionmakers』第265号、2006年、51頁）。
- (29) 中谷鹿二が編纂した『善隣』の発行状況と誌面の内容については、李素楨『日本人を対象とした旧「満洲」中国語検定試験の研究』東京：文化書房博文社、2013年が詳しい。
- (30) 小林昌樹編『雑誌新聞発行部数事典—昭和戦前期 附．発禁本部数総覧』金沢：金沢文圃閣、2011年、109頁。
- (31) 同上、50頁及び36頁。
- (32) 日本放送協会『昭和十七年 ラヂオ年鑑』東京：日本放送出版協会、1942年、137頁。
- (33) 「発刊之辞」『支那語雑誌』創刊号、東京：春陽堂、1932年10月、2頁。
- (34) 「初級支那語 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第二巻』東京：不二出版、1997年、338頁。
- (35) 宮原民平（みやはら・たみへい、1884～1944）：1904年、拓殖大学の前身である台湾協会学校に入学。在学中に陸軍省学生通訳官を志願して、日露戦争に従軍した。卒業後に北京に留学し、帰国後拓殖大学で教授、「支那語」の科目を担当。中国戯曲、元曲について多数の論文・翻訳を発表。
- (36) 「支那語雑誌 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、75頁。
- (37) 奥平定世（おくだいら・さだよ、1902～1984）東京外語支那語部卒。大阪商科大学、第一外国語学校講師などを歴任。1932年9月から1933年12月にかけて、日本放送協会大阪放送局で「支那語講座」・「満洲語講座」の講師を担当。1934年、40篇の白話文を収録した上中下の三巻の『標準支那語読本』を刊行した。1936年、松枝茂夫編『現代実用支那語講座』の第9巻「小説散文篇」を執筆したものである。同年、『現代支那戯曲選集』を刊行。

- (38) 奥平が書いた編集後記では、雑誌を「興味をもつて読了出来るやうに。初学者にも相当のものが読め、一度学習した人には、一層の根柢を与へる。学術的に、而もそれを平易に。斯う云つた気持で皆が筆を執つた」と述べた（「編集後記」『新興支那語』第1巻第1号、東京：尚文堂、1936年11月、50頁）。
- (39) 六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、69頁。
- (40) 辛島驍（からしま・たけし、1903-1967）：中国文学者、東大文学博士。1928年東京帝国大学支那文学科卒、京城帝国大学講師、1939年博士論文「支那現代文学の研究」を東大に提出し、1946年に博士号を授与された。
- (41) 辛島驍「時文教授上の注意」『支那語と時文』第1巻第4号、東京：開隆堂、1939年、29頁。
- (42) 「先学を語る一塩谷温博士」『東方学回想Ⅱ 先学を語る（2）』東京：刀水書房、2000年、154頁。
- (43) 開隆堂出版『心の創造 開隆堂—65年のあゆみ』東京：開隆堂出版株式会社、1989年。
- (44) 「支那語と時文 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、61頁、「関東聯合教育会記録 第31回」浦和：埼玉県教育会、非売品、1936年、17頁を参照。
- (45) 「支那語と時文 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、69頁。
- (46) 1938年2月から3月にかけて、文部省は全国の府知事を通じて、全国の師範学校・中学校・商業学校の漢文科担任教員のなかから若干名を選抜し、東京・大阪・神戸・広島・松山・福岡・鹿児島のみ7か所に「時文」の講習会を開いた（六角恒広『近代日本の中国語教育』東京：不二出版、1984年を参照）。
- (47) 「塩谷温を聞く」開隆堂出版『心の創造 開隆堂—65年のあゆみ』東京：開隆堂出版株式会社、1989年、51頁。
- (48) 辛島驍「時文教授上の注意」『支那語と時文』第1巻第4号、東京：開隆堂、1939年10月、28頁。
- (49) 黄子明「休刊告白」『白話』第12号、北京：白話研究社、133頁。
- (50) 同上。
- (51) 六角恒広編『中国語教本類集成第三集第二巻』東京：不二出版、1997年、356頁。
- (52) 同上。
- (53) 「編輯室より」『支那語』第8巻第3号、東京：外語学院出版部、1939年3月。
- (54) 「読者の声」『支那語』第7巻第12号、東京：外語学院出版、1938年12月、26頁。
- (55) 「読者の声」『支那語』第9巻第7号、東京：外語学院出版、1940年7月、49頁。
- (56) 同上。
- (57) 「読者の声」『支那語』第9巻第12号、東京：外語学院出版、1940年12月、49頁。
- (58) 「読者の声」『支那語』第7巻第12号、東京：外語学院出版、1938年12月、26頁。
- (59) 「読者の声」『支那語』第9巻第7号、東京：外語学院出版、1940年7月、49頁。
- (60) 「読者の声」『支那語』第9巻第2号、東京：外語学院出版、1940年2月、49頁。
- (61) 例えば、1935年12月号の『支那語』には「関東局支那語奨励試験問題及回答」という記事が掲載された。また同年、外語学院出版部編『受験参考 満洲語問題の捉え方』の広告が『支那語』誌上に掲載されており、「満洲国及び本邦における各種（満鉄・満洲政府・関東

- 庁・憲兵官試験等)の支那語試験問題を通覧し出題者の意向を忖度しその系統を探ね此後主題さるべき問題を把握して数百種の問題を掲げ模範解答を付した」という宣伝文が記されている。
- (62)「外語支那語講習会」の広告は1938年頃に『支那語』に掲載されている。ここでは『支那語』第7年第7号の広告を参照している。
- (63)『支那語』第7巻第7号(1938年)の広告によれば、「東京外国語学校教授 宮越健太郎氏 東京外国語学校講師 包象寅氏 善隣高商教授 木村愛香氏 陸軍士官学校教官 藤木敦実氏 陸軍士官学校教官 麻喜正吾氏 東洋大学教授 北浦藤郎氏 東京外国語学校教授 内之宮金城氏 陸軍士官学校教官 田中清一郎氏 山口高商 鐘ヶ江信光」という講師陣の構成であった。さらに「各講師が聴講者各位の質問に応ずるは勿論、更に徹底を期するため数名の助手を起きました」というように授業の助手も置かれたようである。
- (64)『支那語』第5巻第5号、東京：外語学院出版部、1936年5月。
- (65)「後記」『支那語』臨時増刊実務翻訳号、1938年5月、64頁。
- (66)六角恒広「附稿一 「支那語」学習雑誌の消長」『中国語教育史稿拾遺』東京：不二出版、2002年、250頁。
- (67)藤井省三『東京外語支那語部一交流と侵略のはざままで』東京：朝日新聞社、1992年、160頁。
- (68)塩谷温「善隣の至宝」『支那語と時文』第1巻第1号、東京：開隆堂、1939年7月。
- (69)藤井省三『東京外語支那語部一交流と侵略のはざままで』東京：朝日新聞社、1992年、165頁。
- (70)岩村成允「支那語講習の心得」『ラヂオ・テキスト支那語講座』1938年秋季号(下巻)日本放送出版協会、温秋穎「日本放送協会「支那語講座」のメディア史(1931-1941):他者の言語はいかに想像されたか」『メディア研究』第101号、2022年、119-136頁を参照。
- (71)小川環樹「自由不羈の精神」青木正児著『青木正児全集』第2巻、東京：春秋社、605頁、「学問の思い出—竹田復博士を囲んで」『東方学回想Ⅲ 学問の思い出(1)』東京：刀水書房、2000年、208頁、倉石武二郎『中国語五十年』東京：岩波書店、1973年、9-12頁などを参照。
- (72)岩村成允(いわむら・しげみつ、1876～1943):1897年外務省清国留学生制度で北京留学。その後外務省に入省して在中国領事館で働く。1927年に外務省本省に戻り書記官になり、東方文化事業などに携わった。1938年頃、外務省囑託になり日本放送協会「支那語講座」に携わり、同年から1942年まで、東京の東方文化研究所で評議員を担当(温秋穎「中国通外交官・岩村成允(1876～1943)の情報活動—中国語の使用という視点から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』第68号、2022年、123-136頁を参照)。
- (73)「華語新声 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第二巻』東京：不二出版、1997年、323頁。
- (74)同上、317頁。
- (75)同上、324頁。
- (76)「支那及支那語 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、46頁。
- (77)同上。
- (78)「学界時言」『支那語雑誌』1943年8月号、東京：蜚雪書院、3頁。
- (79)「編集後記」『支那語雑誌』1943年8月号、東京：蜚雪書院、64頁。

- (80) 「編集後記」『新興支那語』第2巻第6号、東京：尚文堂、1937年6月、50頁。
- (81) 『支那及支那語』は、1941年の第3巻第8号以降、編集者名が大阪外国語学校大陸語学研究所となった。また、1943年11月に『支那語文化』と改題された。
- (82) 執筆者の高等商業学校の教員としては、栗山茂（高松商業学校教授）、牧治雄（同志社高等商業学校教授）、須藤義男（神戸北神商業嘱託）、宇佐美一男（佐世保商業学校教諭）が挙げられる。
- (83) 「支那及支那語 創刊号」六角恒広編『中国語教本類集成第九集第三巻』東京：不二出版、1997年、46頁。
- (84) 「御願ひ」『支那及支那語』1940年8・9月号、東京：宝文館、1940年9月、28頁。
- (85) 高畑彦次郎（たかはた・ひこじろう、生没年不詳）：帝国大学言語学科卒。1928年から1929年にかけて、比較言語学の方法に基づいた中国語音声史研究の序説であった「支那語の言語学的研究」を京都文学会『芸文』で連載させ、1932年に『支那学』第6巻の3号と4号に「文献学と古代支那」を掲載した。
- (86) 頼惟勤（らい・つとむ：1922～1999）：1943年、東京帝国大学文学部支那哲学支那文学科卒業。戦後復員の後、倉石武四郎の世話で京都帝国大学教務嘱託。1952年にお茶の水女子大学専任講師、1959年に助教授、1964年に教授。中国音韻学専門。
- (87) 「支那及支那語第三巻総目録」大阪外国語学校支那研究会編『支那及支那語』1942年12月、宝文館、50-51頁。
- (88) 「編輯後記」大阪外国語学校支那研究会編『支那及支那語』1940年12月号、東京：宝文館、50頁。
- (89) 「大陸言語研究所による「支那語発音字典」について」大阪外国語学校支那研究会編『支那及支那語』1942年1月号、宝文館、28頁。
- (90) 王力『中国語言学史』上海：復旦大学出版社、2006年。
- (91) 伊地智生「編後」大阪外国語学校大陸語学研究所『支那及支那語』1942年12月号、宝文館、52頁。
- (92) 「支那語に於ける転換期と学者の使命」『支那及支那語』1940年4月号、東京：宝文館、29-30頁。
- (93) 「我等の主張 “聴” と “説”」『支那及支那語』1939年9月号、東京：宝文館、1頁。
- (94) 大原信一（おおはら・のぶかず、1916～2003）：1937年に大阪外国語学校支那語部卒業後、同校大陸語学研究所員。京都女子大学教授、大東文化大学教授、同志社大学商学部助教授を歴任。主な著書にカールグレン『中国の言語：その特質と歴史について』（共訳、江南書院、1958）、『近代中国のことばと文字』（東方書店、1994）、『中国の識字運動』（東方書店、1997）などが挙げられる。
- (95) 大原信一「支那語音声学の生長のために」『支那及支那語』1942年11月号、東京：宝文館、31頁。
- (96) 比較言語学の分野において、研究の重点が、徐々に「国語」としての日本語や、日本語と朝鮮・満洲地域を始めとする諸言語の類似性を論じることに置かれるようになったことは、長志珠絵『近代日本と国語ナショナリズム』東京：吉川弘文館、1998年、イ・ヨンスク『「国語」という思想—近代日本の言語認識』東京：岩波書店、2001年を参照。後藤朝太郎による中国語研究としては、『漢字音の系統』（東京：六合館、1909年）、『現代支那語学』（東京：博文館、1908年）、『文字の研究』（東京：成美堂、1910）が挙げられる。いずれも近代

- 日本において、言語学の方法で中国語を研究する最初期の研究といえる。後藤は1920年代以降、中国に度々旅行し、中国の文化や風俗、民情をテーマとする文書を数多く発表し、当時の「支那通」としてよく知られていた。胡以魯は1912年に東京帝国大学文学科言語学専修を卒業し、学士の学位を取った（東京帝国大学編『東京帝国大学卒業生氏名録』東京：東京帝国大学、1926年、277頁）。後に北京大学で言語学を教え、『国語学草創』を出版した。
- (97) 六角恒広編『中国語教本類集第九集第三卷』東京：不二出版、1997年、57頁などを参照。
- (98) 以上はそれぞれ、創刊の同年である1939年の6月号、7月号、8月号、9月号、10月号の巻頭言である。
- (99) 「我等の主張 日本人の支那語」大阪外国語学校支那研究会『支那及支那語』1939年10月号、東京：宝文館、1頁。
- (100) 金子二郎（かねこ・じろう、1905～1986）：1926年に大阪外国語学校支那語部を卒業、同大学支那語部教授、大阪外国語学校支那研究会編『支那及支那語』の中堅的な執筆者。同誌で発表された文章に、「支那口語文法序説」「支那に於ける語文運動に関する覚書（その一）漢字改革運動の理論と方案」胡適著・金子二郎訳「国語文法概論」、王力著・金子二郎訳「支那語学概論」が挙げられる。戦後の1957年に『初級中国語読本』（上巻・下巻、江南書院）、1960年に『中国語入門』（大安）を出版し、1965から1969年にかけて大阪外国語大学長、1970年から1985年にかけて大阪府日中友好協会会長を務めた。
- (101) 伊地智善継（いじち・よしつぐ、1919～2001）：1939年に大阪外国語学校卒業し、商社に入社。金子二郎と倉石武四郎の勧めのもとで、1940年に京都大学支那文学科に受験し合格した。1950年代、倉石武四郎監修の中国語学習誌『中国語』で中国語文法に関して多数執筆した。1977年から大阪外国語大学学長を務めた。
- (102) 「学問の思い出 倉石武四郎 座談会 倉石博士を囲んで」東方学会編『東方学』第40輯、1970年、16頁。
- (103) 伊地智善継「序—中国語、そして私」『伊地智善継・辻本春彦両教授退官記念 中国語語学・文学論集』東京：東方書店、1983年、1-2頁。
- (104) 倉石前掲『中国語五十年』、53-55頁。
- (105) 同上。
- (106) 伊地智前掲「序—中国語、そして私」、2頁。
- (107) 同上。
- (108) 同上、3頁。
- (109) 伊地智善継「いわゆる「軽声」についての諸問題」『支那及支那語』1942年7月号、東京：宝文館、2-15頁。
- (110) 倉石前掲『支那語教育の理論と実際』、203-222頁。
- (111) 金子二郎「一つの試み」『支那及支那語』1942年9月号、東京：宝文館、2-7頁。
- (112) 「編後」『支那及支那語』1942年9月号、東京：宝文館、50頁。
- (113) 伊地智善継「支那語教授法への反省と一つの試み」『支那及支那語』1942年9月号、宝文館、11頁。
- (114) 同上、9頁。
- (115) 大原信一「支那語音声学の生長のために」『支那及支那語』1942年11月号、東京：宝文館、31頁。

- (116) 「編後」大阪外国語学校大陸語学研究所『支那及支那語』1943年5月号、東京：宝文館、50頁。
- (117) 『新中華』が『支那語雑誌』からの復刊であったことは、『新中華』第1巻第1号の編集後記や、『中国語雑誌』第6巻4～6号の「休刊の御挨拶」から推測できる。
- (118) 「巻頭言 華語の回復」『新中華』第1巻第1号、帝国書院、1946年6月。
- (119) 同上。
- (120) 温秋穎「NHK ラジオ・テレビ「中国語講座」の戦後史：日中国交正常化前の語学学習と中国認識」『メディア史研究』第53号、2023年、125-150頁を参照。